

バスルームのドアが開く。

現れた優香の、その大きすぎる私のバスローブで裸体を包んだ姿に、私の頭から美佐子の影が消える。

私は立ち上がり、歩み寄って来た優香のバスローブに包まれた肩を抱く。日頃私が使用している男性用ボディシャンプーの匂いが優香の体臭と混ざり、香る。その匂いアンバランスさに刺激され、私は欲情を覚える。

優香の唇に、自分の感情を押えこむように努めて優しく唇を重ねる。彼女には男性の粗暴さを示すのは得策ではないはずだ。

キスに応え、わずかに開いた優香の唇を放し、私は彼女の耳元に囁きかける。

「シャワーを浴びて来るからローブを脱いでベッドに入ってよ、ここにはバスローブが一つしかないんだ」

少し緊張がほぐれたのか、優香が微笑む。

私はシャワーを浴び、わざと香が少ない石鹸を使って身体を洗う。

脱衣所には先程まで優香が着ていた、わずかに湿ったローブがたたまれて置かれていた。

私はローブと優香の香とを身にまとい、バスルームを出る。

部屋の電灯は消され、小さなナイトランプだけが灯されていた。

私はベッドで、私を見つめる優香に歩み寄り、再び口付ける。唇を割り舌をすべりこませると一瞬の躊躇の後、彼女の舌が絡み付いて来た。その動きが次第にためらいを捨て去り、欲情を示すものになった時、私は顔を離す。

うなじから耳たぶへと舌を這わせていく。耳の後ろ側を舌尖で刺激すると優香が小さな声を上げた。

薄い掛け布団を捲くり上げ、その下の優香の胸に手を伸ばす。横になってもその豊かな弾力の為だろう、乳房は形を崩さず豊かな丸みを見せている。ゆっくりとその張りのある柔らかさを楽しむように揉みながら、頂点の乳首に触れる。

「あっ……」

優香が低く声を上げた。

固くなった乳首に私は口付け、舌尖でその先端を刺激する。軽く歯を立てると再び彼女が小声

を上げる。そのまま手を彼女の下半身にすべらせていくと、下着の感触が手に触れた。私は顔を上げ、目を閉じたままの優香に囁く。

「まだこんなものを着けているのかい……。自分で脱いでごらん」  
「えっ……」

優香が目を開ける。

「そんな……」

「君が下着を取るところが見たいんだ、さあ」

私が優香を急かし、勢いよく掛け布団をまくり上げると、パンティ一枚の優香の姿態が、微かに黄色かかったナイトランプの光の中に白く浮び上がった。

優香は一瞬、身をすくませるが、すぐにその顔に微笑が戻る。

「エッチ……」

彼女が上半身を起し、私に背を向けた姿勢で下着に手を伸ばす。私はそんな彼女の背中を抱き、前に回した両手で乳首を愛撫しながらその光景を見守る。

指先に挟みこんだ乳首が固く尖っていく。

優香は腰をわずかに捻り、パンティを脚から抜き取る。薄暗い光の中に彼女の白い下半身を飾る黒い陰毛の影が浮ぶ。

私とその部分を見詰めているのを感じたのだろう、優香の脚がゆっくりと左右に開きはじめ、その狭間に淡い色をした彼女そのものが覗く。

優香の息が乱れはじめ。

私は両手の中の乳房を心持ち強く揉み、指の間に挟みこんだ固い乳首を刺激する。

優香がわずかに身体をよじらせ、そして腕に唇を寄せ舌をはわす。

「もつと開いて……」

耳に囁くと優香の脚が大きく開き、私はその中心の陰毛の黒さの向こうに、彼女のぬめりはじめている淡い肉を見る。

「濡れている……」

囁くと優香の腕が私に絡み付いて来た。

「いや……。言わないで……」

太股の狭間に手をすべりこませ、その付根の敏感な部分を触れるかのように摩り上げると、ぬめった手触りの奥から熱いしたたりが溢れだしてくる。

「あっ……」

指先でまさぐると優香が小さく声を上げ、反射的に太股が私の手を締め付けて来たが、すぐにそれは解けいく。

指先に、彼女の狭く窄まった肉穴が触れた時、抱かかえた優香の身体に、小さな震えが走った。

「恐い？」

私の問いかけに優香が小さく首を振り、その顔が私を向く。

「キスして……もう一度」

唇を重ね、そしてゆっくりと指を進めていく。

窄まった、しかし熱く濡れた肉の感触。そこは彼女の繰返す息遣いのままに細かく震えていた。

そして私はそのまま優香をベッドに再び横たえ、その身体を組みし抱くように覆い被さって行く。

身体が重なった時、彼女の腕が私の背中を強く抱しめ、その唇からは満足しきったような溜め息にも似た声が漏れだした。

「ああ……」

優香が瞳を閉じる。

十分に、欲情の蜜を湛えているにもかかわらず、挿入には抵抗があった。

私は優香を身体の下に抱きながら、額に汗を浮べ、目を固く閉じている彼女に向かって囁く。

「きついかな？……」

優香が目を開ける。

「うん……少し……、でも大丈夫……」

彼女の甘い息が私に吹きかかる。

腰を少し押し進めると、優香が歯を噛み締めた。

私は、処女ではないとはいえ、中学生以来男を知らない彼女にいとおしさを覚え、汗に濡れて髪の毛が張付いた額に優しく触れる。

「大丈夫かな？」

「はい……来て……来て欲しい……」

私は優香のその言葉を聞き、耐え切れずに一気に彼女を貫く。

「ああっ！」

その瞬間、彼女は大きく声を上げ、その身体は強い抵抗を見せる。私は背中に彼女の爪の固さを感じる。

その手からゆつくりと力が抜けていき、脚が腰に絡み付いてきた時、私は彼女を更に強く抱き、そのまま動きはじめた。

私は、まだ男に馴れていない優香の膣の強い抵抗を意識しながら努めてゆっくりと動く。

男とのセックスは殆ど無経験であったのだろうが、そのマスターベーションの経験からか、優香の性感は十分に発達していた。はじめは苦痛の表情を浮べていた彼女であったが、次第にその

表情には苦痛以外のものが混じりはじめた。

私に動きに従って、彼女が軽く息を弾ませながら声を上げる。眉をよせ、一見苦痛とも見える表情を浮かべているが、口から漏れる声と息はそれを裏切りはじめている。

「ああ……変よ、なんだか変……」

優香は何度も同じ言葉を憑かれたように繰り返す。

彼女の手が、私の背中を撫で回すように動き、時折り自分の身体に、私の身体をより密着させようかともいうように力をこめ、抱き寄せてくる。

彼女の強い締付けが私に与え続ける快感に、私は自分の限界に近いのを感じ取る。

私は彼女の背中に回していた手をベッドとの狭間から抜き、その頬に触れる。小指と薬指とを唇に触れさせると、優香が指を咥え取り、舌をはわす。

私は彼女の舌の感触によって、射精への衝動が押え切れないレベルまで昂ぶっていくのを感じる。

私は動きを早める。

優香がその表情をさらに歪め、身を反り返す。優香自身が私そのものを強く締め付けてくる。

私は、優香のともすれば離れそうになる身体を強く押しこみながら激しく動き、そして欲望の解放に向けて更に自分を駆立てていく。

優香の脚が上り、私の腰を挟み付けてきた時、私は自分自身を彼女の中に解き放った。

私はまだ私自身を優香の中に納めたまま、射精後の余韻の中にいた。

彼女が私の唇に軽く触れ、微笑む。

「ありがとう……」

私は身体を起し、彼女の汗で濡れた髪の毛の生え際に手をやる。

「君はまだだったんだらう？」

「え？」

優香が私を見返す。だがすぐに言葉の意味を理解し、微笑む。

「うん……でも、いいの、ステキだったわ……」

優香がもう一度微笑み、そしてベッドを出る。

私は彼女の裸の後ろ姿を目で追う。豊かで見事な曲線を描くその尻から伸びる太股には、私が彼女に注ぎこんだ精液がナイトランプの光に、鈍く光っていた。

私は、私の中で新たな欲望が頭をもたげるのを意識する。

優香がシャワーを使い出す音を聞いたとき、私はベッドを出る。

バスルームのドアを開くと、湯気の間こうに彼女がシャワーを使って下半身を洗っている光景が目に見えこんできた。

はじめて明るい光の下で見る彼女の身体は、先程私が全身で感じとった以上のものだった。濡れた髪が張付いた優雅なカーブを描く首筋から続く細い肩、その細さと見事に対比する形の整った乳房、なだらかな腹とワンポイントマークのような臍、そしてそこから急なカーブを描き出す腰と尻、それに続く太股、脚。

優香が驚きの声を上げ、振り向く。

私の姿を認めるとその顔に恥ずかし気な表情が浮んだ。

「驚いたわ」

シャワーをフックに戻し問いかけてくる。

「どうしたの？」

「第二ラウンドの開始だよ」

私はふざけて言う。

「……ばか……。後でベッドで……」そして微笑み。

「いや、待てないよ。ここぞだ」

私は彼女の返事を待たずに歩み寄る。そのまま肩を抱き唇を奪う。

彼女は一瞬私から逃れようと身を捻るが、強く身体を抱き寄せるとそんな抵抗がやんだ。

私は後ろ手でバスルームのドアを閉める。

優香を立たせたままボディシャンプーを手に取り、その全身に塗り付ける。

シャンプーでぬめった乳房の柔らかさを楽しみながら、手のひらで円を描くように擦り上げると、歪んだ豊かな肉の上で乳首が固くなり、その存在を誇示しだす。

脇腹から背中に私はさらに手を伸ばしていく。

身体を密着させながら、背中から下に向けてシャンプーを広げて行くと、柔らかな尻が手に触れる。

その尻にも十分にシャンプーをまぶした後、私は彼女を抱き寄せる。彼女の腕が私の背中を抱き寄せる。

私達は含み笑いしながら、互いの身体をシャンプーのぬめりのなかでまさぐり合い、相手を興奮させようと身体を擦り合わせる。

優香の陰毛が私の太股でざらつく。私は手を彼女の尻の狭間にぬめりこませ、その内にある複雑な二つの窄まりにぬめる指をはわす。

優香が太股を私にすり寄せてくる。既に張詰っていた剛直が彼女の太股に触れ、優香が驚いたように息をのむ。

私は彼女の手を、勃起した股間に持つていく。一瞬の躊躇の後、彼女が剛直を壊れ物でも扱うように優しく握ってくる。

「こんなに熱くなっているわ……それに、とつても固い……」

私は彼女の耳に囁きかける。

「もつと強く握って、前後に擦るんだ」

彼女はそれに応え、私に命じられたとおりに剛直を愛撫しはじめる。

優香の手に握られる私の剛直。それは彼女の小振りな手と比較すると、あまりに狂暴なものように見えた。節くれだった固い肉。男の欲情が一つに集約され形成された欲望の塊。

その自覚と、そして彼女に剛直を摩られる快楽の中で、剛直が更に固く勃起していく。

私はシャワーをフックから外し、下腹部に付いたシャンプーの泡を洗い流す。

優香が問いかけるように、視線を向けてくる。

私が彼女の肩に手を掛けゆつくりと押し下げると、彼女はそのまま床に膝をつき、目前の剛直を口を含む。瞳が、まるでその感触を味わいつくすかのように閉じる。

優香は、数日前に夜の公園で見た光景を思い返していた。そしてその夜の、自分の部屋で行った激しいマスターベーションと、絶頂の際に思い描いた想像上の光景を。

彼女は口の中にある固く熱い肉に舌を這わせる。先程命じられた事を思い出し、頭を前後に振り、窄めた唇で剛直を刺激する。

優香が私の先端の窪みに舌尖を押し付け、そこを吸い上げた時、私はその鋭角的な快感にうめきを上げる。

彼女の舌と唇を楽しんだ後、私は彼女を立たせる。

シャワーを再び壁のフックから取り、彼女の身体の前面に付いた泡を洗い流す。健康な張りを持った優香の肌が湯を跳ね散らせる。

続いて私は、彼女の背後ろに回り、そこに付いたシャンプーの泡を洗い流した後、その湯の流れの中で曲線を描き出している彼女の背骨のラインに沿って、舌をはわして行く。

暖かな湯と、優香のなめらかな肌が舌に触れる。

唇が彼女の尾底骨に当たるまで身を屈めた時、私はシャワーを床に置き、彼女の腰が二つの豊かな半球を描きはじめる辺りに舌をはわす。彼女の背中と腰が、恥ずかしげにくねる。

「あの夜、君が見た美佐子のように自分で開いて見せてくれ」

その私の言葉に、優香はまるで剛直を口で愛撫しながら想像していた事を知られたかのような軽い驚きを感じる。

今、このままあの時の美佐子のように自らを割り開くと、彼女の全てが晒け出されてしまう。

彼女はためらった。だがそのためらいの中にも甘い期待にも似た気持ちちが潜んでいる事も又、彼女は自覚していた。

私の舌が優香を追いこむように動き、快感を引出していく。

私を手を彼女の太股の狭間に差しこむと、力が抜ける。そのまま摩り上げると、彼女は遂に両手を尻にかけ、私の目前にその肉の狭間の全てを晒け出す。

「もっと開いて」

私が言う。

「ああ、許して……」

彼女の、そんな言葉とは裏腹に、その手は私の前で尻房を更に押し広げていく。

歪んだ白い尻肉の狭間に、湯に濡れて陰毛をまとわり付かせた肌色の肉壁と、それに囲まれた、もっと繊細で淡い色をした桜色の粘膜、そしてその内側をわずかに覗かせる女の部分が覗き、その上には翳った色合をした小さな窄まりが息衝いている。

優香のそこは、既に湯よりももっと密度の濃い粘液で濡れていた。

私は彼女の、その狭間に顔を近づけ、舌先で肉穴に触れる。湯よりも熱いしたたりがぬめり、彼女がその感触に身をすくませる。

私は優香のしたたりを、彼女の秘部全体に塗り付けるようにして舌をくねらせる。手を前に回し、陰毛の中で際立つ、快樂の肉の芽に優しく触れる。

「あっー！」

私が抱きしめる身体が震え、滲みだしたぬめりが太股を垂れ落ちていく。

私は彼女を愛撫し続ける手を休める事なく、舌を秘部の上のもう一つの窄まりにはわす。

「あつ、そんなところ……」

一瞬彼女のそこは、私の舌の感触に緊張の窄まりをみせたがるが、舌を押し付け、愛撫するうちにそれも消えていった。

優香が欲情した熱い息を吐きはじめる。

私は立ち上がり、彼女に前の壁に手を付き尻を突き出すように求める。

彼女が脚を広げて立ち、尻を私に向けて突き出す。その時私は一瞬、美佐子に今の優香と同じ姿勢を取らせた時の事を思い返す。

私の脳裏で優香と美佐子の姿態が重なり合っていく。

心にある考えが浮んだ。

私は彼女の尻の狭間に剛直を押し付け、彼女が自分から私を求めてくるまで、その先端で濡れた肉壁を愛撫する。

優香がもどかしげに腰を蠢かせ、そして、待っていたその動きを見せた途端、私は深く彼女の中に押し入れる。

ベッドの時よりも緊張が少ないせいなのか、そこには強すぎる抵抗はなかった。私は太股と下腹部で、彼女の豊かな尻の柔らかさとその弾力を楽しみながら、腰を動かす。

彼女のあえぎ声が徐々に高まっていくなか、私は両手を前の乳房に回し、その柔らかな量感を、尻の感触とともに楽しむ

彼女の耳に口を寄せ、囁く。

「自分でする時のようにしてごらん」

性的な昂ぶりに酔った優香が、私の言葉に抵抗もせずに従う。

壁に付いていた手を自分の下腹部に伸ばし、指が尖った肉の芽を摘まみ上げる。

「ううー！」

生じた強い快感に優香が声を上げ、一瞬の緊張が私の剛直に伝わってくる。

私は、彼女を絶頂に導くべく腰の動きリズムカルに、そして彼女の奥のポイントを突き上げるように動かす。

喘ぐ優香の手が、憑かれたもののように強く肉の芽をもてあそび、彼女は股間の二つの個所から全身に広がっていく快楽を貪り続ける。

優香が、早く切迫したような息をつきはじめ、あえぎを上げる。

私は彼女に私自身のピークを合せようと、更に動きを早める。その動きが更に彼女に快感を送りこんでいく。

「あああー！」

優香の身体が大きく震えだし、まるでこの場でなければ、苦痛による悲鳴としか聞えないような声を絞り出す。

私がさらに激しく、突き上げるように動きはじめると、彼女の声の調子が更に変化する。

前の壁に付いた手の指がまるで何かを掴む時のように曲り、身体を支える脚が大きく、そして細かく痙攣しはじめる。

彼女の尻の間から出し入れされる私の剛直は、濃く粘るぬめりによって濡れ、射精直前のように大きく固く張り詰めている。

私の突き上げる動きによって歪む彼女の尻が、私の動きに合わせて上下し、そしてその動きの激しさが増していく。

「おおー！」

ついに優香が絶叫し、そしてピークを迎える。

セックスによる絶頂。彼女にとって、それは一つの小さな「死」であった。またそれは、古い今までの彼女が肉の快感の中に消え去り、新たな彼女が生れる時の産声だったのかも知れない。

私はその瞬間の彼女の強い締め付けのなかで、多量の白濁をその奥底に放出していた。

優香が、身体の中にわだかまり、そして徐々に溶けていく深い快楽の余韻の中で、小さな痙攣にも似た震えを繰り返す。



私は優香を抱きしめる。



翌日、早速上司から次の開発プロジェクトの説明があった。

今回も先日終えたプロジェクトと同じメンバー構成が、そのまま引き続けられる事になり、私は、優香と一緒に仕事出来る事を喜んだ。

昨夜。優香はあのバスルームでの行為の後、私に長いキスを残し家路についていた。

既に終電車も終わった時間であった為、泊っていくように勧める私に対して「今日は一人で色々考えたいから……」と答えた彼女に、私はタクシーを呼ぶ電話をダイヤルするしか出来なかったのだ。

そして今日の朝。

優香は出勤してきた私に明るく挨拶をした。彼女の浮かべた微笑みには寝不足の兆候など何処にもなく、そしていつもと同じ、そう、美佐子と同じ香水が彼女から香っていた。

挨拶を返す私に、優香が回りに聞いている人がいないのを確かめてから、囁きかけてくる。

「また、ね」

その彼女の浮かべた微笑みには、秘密を共有する者だけに通じる悪戯っぽい表情が混ざっていた。そして多分、その時の私も彼女と同じような微笑を浮べていたはずだ。

「喜んで」

私は答え、そして歩み去って行く彼女の後ろ姿を見送りながら、自分の生活がより一層楽しいものに変化したのを実感してした。

優香は、既に私を初めとする同僚と同じレベルで仕事出来るようになっていた。

そんな彼女の姿を私は、仕事の合間に目で追い、その服の下で息づいているだろう肉体を思い返した。

そんな時、当然感情は刺激されたが、それは以前のように切迫感のあるようなものではなくなっていた。そう、まるで、どこか一歩離れた所から自分のその感情を観察する事が出来るような気がするのだ。

そしてそれは容易く、欲望に変化させる事が可能なものなのだ。

仕事帰り。

私は優香と食事を共にする。

レストランで、私の正面に座った彼女はよく笑い、旺盛な食欲を見せた。私は彼女との会話の間にその唇を見る。薄い口紅が塗られたそれは、妙にエロチックであり、昔の中東では口紅が娼婦の印であったという、どこかで聞いた事が私の心に浮んだ。

食事を終え、分かれ道に来たとき私は、ある期待をその仕草で示している優香に言う。

「昨日誰さんに体力を消耗させられたから、ちよつと疲れたよ」

勿論ユーモアに紛れさせた言訳だ。

優香が私の言葉に顔を赤らめ、伏せる。

「ばか……」

私はそのままの調子で言葉を続ける。

「次はきつと御期待に添うようにするから、今夜は我慢してよ」

「もう……」

優香が私の腕を拳で軽く叩く。

「じゃ……」

私は優香に手を振る。彼女の表情が一瞬曇るが、すぐに微笑みが蘇る。

「うん」

優香はもう一度私を見つめ、背を向ける。

私は美佐子の部屋に電話を掛け、いつもの調子でこれから行く事を告げる。

「うん、待ってる、食事は済んだの？」

「済ましたよ。なんか買って行くかうか？」

「そうねえ、この前みたいにワインが飲みたいわ」

「了解」

電話を切る。

美佐子の声には私は、この前彼女の部屋のバスルームで彼女を抱いた時と、昨日優香を自分の部屋のバスルームで同じ姿勢をとらせ、抱いた時の事を思い浮べる。

私はリカーショップに寄り、赤ワインを買ってから美佐子の部屋に向かう。

以下、次回へ